

ロシア人大学生による日本語の音声習得状況

—日本語レベルと発音の不自然さ—

ゲント大学・お茶の水女子大学 小熊利江

1. 背景

近年、外国語によるコミュニケーション能力が重要性を増し、第二言語習得研究は言語学において注目されている分野である。日本語学習においても、自然な発音で流暢に話したいという学習者からの要望はあるが、授業では発音指導があまり行われていないことが多い。日本語の音声習得研究がまだ限定的なことが、その原因の一つであると考えられる。第二言語習得理論の構築には、様々な母語話者を対象とする研究を行う必要があるが、これまで音声習得研究の対象は日本語学習者数の多い英語母語話者や中国語母語話者などに限られている。今後は、他の母語話者も対象とした日本語の音声習得研究を行うことが必要である。

日本語教育に200年以上の長い歴史を持つロシアにおいても、ロシア語母語話者（以下、「ロシア人」とする）を対象とした日本語の音声習得研究はほとんど見られない。その上、日本語の発音は簡単なので教えなくてもいいという認識を持つロシア人教師が多く、授業では発音指導があまり行われていない。しかしながら、仲矢・稲垣（2005）による調査では、ロシア・NIS 諸国の日本語教師の不得意分野として音声関連の指導が最も多く挙げられている。また、渡辺（2011）の研究では、ロシア語圏の日本語教師には音声指導を行うための十分な知識がなく、学習者からの発音改善の要求に応えられていないと報告されている。

発音指導を行うためには、まずロシア人の日本語の発音にどのような問題があるのかを知ることから始めなければいけない。本研究により、ロシア人学習者の日本語発音の特徴や困難点が明らかになれば、日本語の発音指導や教材の開発に役立つと考えられる。さらに、希少なロシア人の日本語音声習得に関するデータを提供することで、第二言語習得理論の構築にも貢献できると考える。

2. 先行研究

現在まで、ロシア人の日本語の発音に関する実証的な習得研究はほとんど行われていない。ここではまず、ロシア人の日本語音声の特徴について、研究者や教師の内省から分析が行われた研究を2件、紹介する。

助川（1993）の研究では、研究者1人の内省の結果からロシア人の音声特徴が示されている。それによると、「ウ」が円唇化の著しい[u]になるなど単音の音色に関する点や、母音の無声化が起きないなどの問題点が指摘されている。また、渡辺（2011）の研究では、ロシア語圏¹で日本語教育に携わるロシア人11人と日本語母語話者（以下、「日本人」とする）11人の内省によって、ロシア人の発音が評価されている。その結果、ラ行がふるえ音になる、「オ」が「ア」と発音されるなど単音の音色に関する点と、特殊拍の長さなどリズムに関する点が、ロシア人の日本語によく見られる問題だと述べられている。ただ、これらは内省による発音評価であり、実際のロシア人の発話をもとにしたものではない。

実際にロシア人の日本語音声を用いて行った研究としては、渡辺・松崎（2014）の研究が挙げられる。研究では、ロシア人教師、日本人教師、一般日本人の3者によって、ロシア人学習者が読み上げた日本語の単語について発音評価が行われた。その結果、日本人教師と一般日本人による発音の評価には共通点が多く見られた。両者に厳しい評価を受けたのは、撥音が不適切に[n]で発音され後続母音と連結して「ナ行」音のように聞こえた場合、音の長さが不十分なため拍が減少した場合、母音の曖

味化によって異なる音韻に知覚された場合であった。研究は、単語を読み上げた音声について評価したものであるが、単語を読み上げる場合には読み手が発音に十分な注意を向けることが可能になる。この研究は、評価者の属性によって音声評価が異なることを示す内容であるが、学習者の音声習得状況を測る際には、発音に注意を向けにくい自然発話スタイルの発話を用いて評価を行うことが望ましいとされている。

最後に、モスクワの大学で専攻として日本語を学習するロシア人の音声習得に関する小熊（2016）の研究を紹介したい。ロシア人大学生の日本語学習歴と日本語能力レベルの関係について分析した結果、学習開始から約9か月の大学1年生は、初級レベルを超えて中級前半レベル以上に達していることが明らかになった。他方、大学5年生の多くは、日本語能力レベルが中級程度にとどまっていた。モスクワという外国語としての日本語学習環境（Japanese as a Foreign Language、以下「JFL」とする）においては、学習を継続していても上級レベル以上への日本語能力の向上が難しいことが示唆されている。

3. 研究の目的

本研究の目的は、ロシア人による日本語の音声習得状況や発音の特徴について明らかにすることである。本稿ではまず、小熊（2016）の研究によって示された日本語学習歴と日本語能力レベルの関係について、より多くの学習者を対象にして分析を行う。その後、ロシア人学習者の実際の日本語発話において、どのような発音の不自然さが発生するのかを明らかにする。その上で、発話中に現れた不自然な音声特徴について分類し、量的な傾向についても明らかにしたい。

4. 研究の方法

4.1 分析対象とするデータ

モスクワの大学で日本語学を専攻するロシア人を対象に、モスクワにて日本語の発話音声の収録を行った。学習者の音声習得状況を測るには、自身の発音に注意を向けにくい、内容のある自発的な発話を用いることが最適であるとされている。そのため本研究では、学習者による自然発話スタイルの音声を収録し分析することにした。

それと同時に、学習者の日本語能力レベルを J-CAT テスト²によって測定した。J-CAT テストは、聴解・語彙・文法・読解の4分野からなるオンラインテストで、発話については測定されていない。テストの結果によって日本語能力レベルは、母語話者相当、上級、上級前半、中級後半、中級、中級前半、初級の7段階に判定される。

対象： モスクワの大学で日本語学を専攻するロシア人学習者 51 人
(1年生 14 人、2年生 10 人、3年生 10 人、4年生 9 人、5年生 8 人)

発話内容： 5 コマ漫画のストーリーテリング³ (長さ 47 秒～3 分 16 秒)

4.2 分析の方法

収録したロシア人学習者 51 人の発話音声について、発音の自然さの観点から評価を行った。評価の方法として、まず各学習者の発音に対して総合点 1～5 (5 が自然度が最も高い) を付ける。その上で、発話中にある不自然な発音の個所を全て抜き出して評価用紙に記し、それぞれの個所について不自然さのレベルを記す。

学習者の発音の不自然さの評価は、音声学の専門家 3 人に依頼した⁴。その結果を集計して、発音の不自然さに関する分析を行った。各学習者の発音の総合点は、3 人の評定者の平均値とした。不自然な発音の個所については、評定者に指摘された個所を全て数えた⁵。

5. 結果と考察

英国日本語教育学会第 21 回大会において、本研究の中間報告を行った。本稿では、大会にて発表された内容のうち、「学習者の学年と日本語レベル」と「発音の不自然さの種類と傾向」という観点から分析された内容について、以下にまとめて報告する。

5.1 学習者の学年と日本語レベル

ロシア人学習者 51 人について、それぞれの学年と日本語能力レベルを表 1 にまとめた。各学年の日本語能力レベルは、大学 1 年生 14 人（中級前半 8 人、中級 3 人、中級後半 3 人）、2 年生 10 人（中級 6 人、中級後半 4 人）、3 年生 10 人（中級前半 1 人、中級 5 人、中級後半 3 人、上級前半 1 人）、4 年生 9 人（中級前半 1 人、中級 2 人、中級後半 4 人、上級前半 1 人、上級 1 人）、5 年生 8 人（中級 2 人、中級後半 4 人、上級前半 2 人）であった。

大学 1 年生 14 人は、調査時に少なくとも約 9 か月の学習歴があったが、テストの結果、全員が初級レベルを超えて中級前半レベル以上の日本語能力だと判定された。モスクワという JFL 環境において、非漢字圏で文法体系も異なるロシア語を母語とすることを考慮すると、大学で日本語学を専攻するロシア人学習者のゼロ初級レベルから中級レベルへの向上の速度は、かなり速いと言えるだろう。

さらに学年が上がるにしたがって、つまり日本語の学習時間が増すにしたがって、日本語能力レベルも徐々に高まる様子が見られた。当該の大学では、日本語の授業時間数が 1 週間に約 10 時間あり、その時間数は 1 年生から 5 年生まで同じである。しかしながら、学年が上がっても、多くの学習者の日本語能力レベルは中級程度に長くどまっている。モスクワという JFL 環境においては、中級レベルに到達以降の能力の向上には時間がかかることが推察される。

表 1： 学年と日本語レベル（単位：人）

| 学年 \ レベル | 初級 | 中級前半 | 中級 | 中級後半 | 上級前半 | 上級 | 母語話者相当 |
|----------|----|------|----|------|------|----|--------|
| 5 年生 | — | — | 2 | 4 | 2 | — | — |
| 4 年生 | — | 1 | 2 | 4 | 1 | 1 | — |
| 3 年生 | — | 1 | 5 | 3 | 1 | — | — |
| 2 年生 | — | — | 6 | 4 | — | — | — |
| 1 年生 | — | 8 | 3 | 3 | — | — | — |

5.2 発音の不自然さの種類と傾向

ロシア人の日本語の発話中に現れる発音の不自然さについて、その種類と傾向について検討を行う。日本語能力レベル比により学習者 10 人をランダムに抽出し、発話中に起きていた発音の不自然さについて集計を行った。その結果を図 1 にまとめる。

それによると、発音の不自然さは「リズム（母音・子音の長短など）」に関するもの 129 か所、「単音の音色（母音・子音）」に関するもの 100 か所、「イントネーション（句末の伸長・上昇など）」に関するもの 51 か所、「話速」に関するもの 6 か所、「音の強弱」に関するもの 4 か所、「母音の無声化」に関するもの 3 か所、「ポーズ」に関するもの 2 か所、「その他（個人の癖など）」17 か所であった。したがって、ロシア人の日本語の発音の不自然さは、上記のように大きく 8 種類に分類されることがわかった。

図1： 発音の不自然さの種類と数（学習者 10 人）

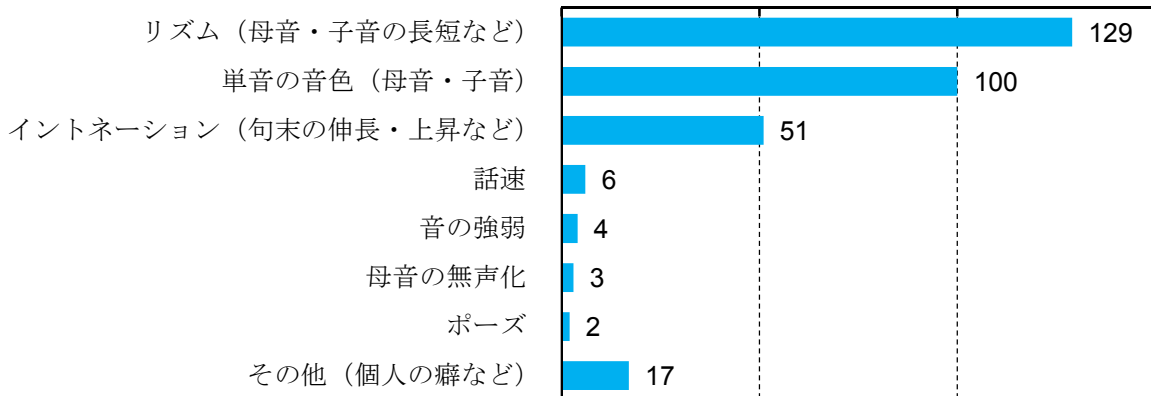


図1を見ると、「リズム」、「単音の音色」、「イントネーション」の3種類は、突出して指摘が多い様子が見られた。これらは、発音の不自然さが特に多い音声特徴であると言えるだろう。なかでも、「リズム」に関する不自然さは最も多く、ロシア人にとって習得が最も困難な音声特徴であると考えられる。

この結果は、先行研究である助川（1993）や渡辺（2011）で指摘された、単音の音色に関する問題（ウ音、ラ行音、母音など）や、渡辺・松崎（2014）で指摘されたリズム（母音の長短）や単音の音色（撥音、母音など）の問題ともほぼ一致する。

6. まとめ

本研究では、モスクワの大学で日本語学を専攻するロシア人 51 人を対象に、モスクワにて自然発話スタイルの発話音声の収録を行った。それらの発話音声について、まず、日本語学習者の学習歴と日本語能力レベルという観点から分析を行った。その結果、モスクワという JFL 環境における学習者の日本語能力レベルは、初級レベルから中級前半レベルまで比較的速やかに向上するが、中級レベル以降は能力向上の速度が緩やかになる様子が見られた。

さらに、ロシア人の発話音声について、発音の自然さの点から評価を行った結果を集計した。発音の不自然さの種類と傾向の観点から分析した結果、ロシア人による日本語の発音の不自然さは、「リズム」、「単音の音色」、「イントネーション」、「話速」、「音の強弱」、「母音の無声化」、「ポーズ」、「その他」に関するものの 8 種類に分類されることがわかった。特に、「リズム」、「単音の音色」、「イントネーション」の3種類は、不自然さの指摘が多い傾向が見られた。なかでも、「リズム」に関する発音の不自然さが多く、ロシア人にとって最も習得が困難であると考えられる。

本稿は、英国日本語教育学会第 21 回大会での発表内容をもとにまとめた大会発表報告である。ロシア人学習者による日本語音声習得に関する研究の中間報告であり、大会の時点における分析内容である。今後の研究の進展による発見や結果から、新たな分析内容になる可能性がある。

謝辞

調査の実施において、筑波大学留学生センターが開発した J-CAT を使用しました。J-CAT の詳細は「<http://www.j-cat.org/>」をご参照ください。本研究の調査で用いた手続き、内容の一部については、JSPS 科研費研究「海外連携による日本語学習者コーパスの構築—研究と構築の有機的な繋がりに基づいて—」（課題番号 24251010、代表者：迫田久美子）を参考に作成しました。

本研究は、JSPS 科研費（課題番号 26884014「ロシア語母語話者による日本語音声習得—教材開発と音声習得理論の構築を目指して—」代表者：小熊利江）、および JSPS 科研費（課題番号 16K02797

「ロシア語を母語とする日本語学習者の音声習得研究—第二言語習得理論の構築のために—」代表者：小熊利江)の助成を受けたものです。

ここに改めて、調査にご協力いただいた皆様にお礼を申し上げます。

注

¹ 渡辺 (2011) の調査対象者には、ロシアの他、ロシア語を母語とするベラルーシやウクライナの一部地域で日本語教育を行っている教師も含まれる。

² J-CAT テストは、筑波大学留学生センターが開発した日本語能力測定テストである。

³ 調査で用いた手続き、内容の一部について、JSPS 科研費研究「海外連携による日本語学習者コーパスの構築—研究と構築の有機的な繋がりに基づいて—」(課題番号 24251010、代表者：迫田久美子)を参考にした。

⁴ 聴覚的な判断を行いそれについて記述するには、専門的な知識や経験が必要とされるため、評定は音声学の研究者などに依頼した。

⁵ アクセントについては、方言による差異や日本人による判断の不一致等の理由により、不自然さの評定から除いた。また、評定者 1 人のみに不自然だと指摘され、かつ不自然さのレベルが最も低く評価されたものは、その不自然さが容認される程度であるとみなし集計対象から除いた。

参考文献

小熊利江 (2008) 『発話リズムと日本語教育』, 風間書房.

小熊利江 (2014) 「ロシア調査」, 『2012 年度科学研究費研究報告書』 111-112. 科学研究費助成事業「海外連携による日本語学習者コーパスの構築—研究と構築の有機的な繋がりに基づいて—」(基盤研究 A, 課題番号 24251010, 研究者代表：迫田久美子)

小熊利江 (2016) 「ロシア語母語話者の日本語音声に関する習得研究—モスクワ調査の概要と日本語能力レベルに関する考察」, 『日本語教育連絡会議論文集』 28 号, 日本語教育連絡会議, 12-18.

国際交流基金 (2017) 『海外の日本語教育の現状 2015 年度日本語教育機関調査より』, 国際交流基金編.

助川泰彦 (1993) 「母語別に見た発音の傾向—アンケート調査の結果から—」, 『日本語音声と日本語教育』 文部省重点領域研究「日本語音声における韻律的特徴の実態とその教育に関する総合的研究」 D1 班 平成 4 年度研究成果報告書, 187-222.

仲矢信介・稲垣滋子 (2005) 「ロシア・NIS 諸国への日本語教育支援再考」, 『日本語教育』 127 号, 51-60.

渡辺裕美 (2011) 「ロシア語母語話者の発音の特徴と指導における問題点—日本人日本語教師に対する調査から—」, 『日本語教育紀要』 7 号, 国際交流基金, 71-84.

渡辺裕美・松崎寛 (2014) 「発音評価の相違：日本人教師・ロシア人教師・一般日本人の比較」, 『日本語教育』 159 号, 61-75.